

江戸文壇における『水滸伝』受容の形跡

Traces of “Suikoden” in the Literary
World of Edo Japan

胡 凱*

“Suikoden”, a novel in colloquial Chinese, was brought to Japan during the early Edo period and was used first mainly as a teaching text for Chinese interpreting. With the monks of the Ôbaku sect and Chinese interpreters setting in central Japan, mandatory comments on Chinese pronunciation for the elimination of Japanese flavor in *kanshi* writings suddenly increased. Scholars of Chinese classics took a growing interest in colloquial Chinese literature. Special attention should be paid to the activities of Okajima Kanzan, who was working as a Chinese interpreter at that time.

About 1720 the Kamigata area became temporarily the center for studies of colloquial Chinese stories. Beginning with “Suikoden”, several translations and commentaries were published, and thus spread among the ordinary readers as well. Furthermore, these eventful stories and their plots abounding in romance blew a fresh breeze into the literary world of the Edo period, which had begun

*HU Kai 吉林大学外国言語文学部日本語学科教師。1988年より神戸大学文学部研修生。論文に「松尾芭蕉と陶淵明」、「八犬伝について」などがある。

to stagnate, and a boom in colloquial Chinese novels occurred. Several adaptations of “Suikoden”, in which only the names of places and characters were transplanted into Japan, were published. There was even extensive textual criticism of “Suikoden”. Such a development certainly had a great impact on the appearance of *yomihon*, which monopolized the literary world during the late Edo period. It finally even gave birth to the longest romance in the history of Japanese literature, “Nansô Satomi Hakkenden”.

From the overall structure down to the composition of small scenes, we can detect throughout “Hakkenden” traces of “Suikoden”. In spite of this influence there is no other literary work which displays the author’s individuality so clearly as “Hakkenden”. The magic world unfolded in the novel, the deliberate hint at an idea of utopia, the compilation on an early modern novel theory—all this made “Hakkenden” a unique literary work, which was not confined to morality or discourse on the principle of causality.

Based on earlier research, I would like to consider in this paper the above-mentioned subject from the viewpoint of comparative literature.

—

今日は「江戸文壇における『水滸伝』受容の形跡」というテーマで、お話しをさせていただくことになっておりますが、本題に入る前に、中国における『水滸伝』の研究事業について、少し申し上げたいと思います。御存知のように、『水滸伝』は『紅樓夢』、『三国志演義』、『西遊記』と並んで、「四大奇書」と呼ばれていますが、それにふさわしい研究はとても不十分だというふうにあります。作者の問題、成立年代、版本等に関して、問題点がかなり多いです

が、特にそのテーマについては、時代によって、評価がだいぶ違ってきます。いまだにそれをめぐって、互いに論争が行われています。例えば、例の文化大革命の間に、『水滸伝』が完全に政治の道具として利用されてきたことは事実で、全く学問的な研究は行えない状態でありました。そのため、『水滸伝』の研究は大変おくらしているわけなんです。またこれも御存知でしょうが、『水滸伝』はかなり古い時代から、外国に伝わりまして、日本を始め、外国文学にも影響を及ぼしたのであります。しかし、これに関しましても、中国というより、外国での研究が進んでいるように思われます。こういったことは又私がこのテーマを取り上げた動機の一つにもなります。

ところで、本題に戻りますけれども、『水滸伝』は何時日本に入ったかという、一つの説としては、室町時代、つまり第三代将軍足利義満の時、それは十五世紀の前半ですから、中国の明に当たります。ということは、『水滸伝』ができてから、間もなく日本に入ったということになります。しかし、この説にはちょっと有力な証拠が見つからないので、まだ更に研究する余地がありますけれども、これに対して、江戸の唐通事、唐通事というのは今の言葉で言うと「中国語の通訳」になりますが、その唐通事の教科書の中には、『水滸伝』など白話小説があったという見方なんです。それを裏付ける証拠は幾らでもありますので、おそらく事実だと思います。

江戸時代というのは、250年間にも亘る長い鎖国時代で、外国との交流はオランダと中国に限られていました。しかもその交流の場所はほとんど長崎ひとつにだけ制限されていたといった具合であります。当時長崎を通じて、日本と中国の間に盛んに貿易が行われたように思われます。貿易ばかりでなく、長崎は同時に外国文化の流入の唯一の窓口でもありました。その中で唐通事はなくてはならない存在でした。

文献によりますと、初代の唐通事は中国人でした。要するに中国から渡ってきた所謂帰化人ということなんです。中国から来たものですから、当然中国語が出来たはずですが、当時には唐通事の役は世襲的で、つまり親が死んで、子

供がその後を次ぐという形を取っていましたから、子供は小さい時から、中国語を勉強しなければなりません。その教科書ですが、儒学が尊ばれた時代ですから、儒教の教典所謂「四書五経」などは暗記させられました。しかし、それらはいずれも非常に古い本ですから、実際には何の役にも立ちません。そこで当時中国で流行っていた大衆小説、『今古奇観』とか、『三国志演義』とか、『水滸伝』など白話小説を教わったわけです。これらの小説はおそらく中国の商人たちが長い海上生活のため、退屈凌ぎに持ってきたように思われます。というわけで、白話小説は最初に文学作品というより、唐通事の実用教科書として使われたのであります。

次は黄檗宗との関係ですが、黄檗宗は本来中国の禅宗の一支流で、1654年中国福建省黄檗山万福寺の住僧隠元の来日がきっかけとなり、日本で普及するようになりました。特に1658年隠元が將軍家綱に九万坪の土地を承って、京都宇治に本山を開いてから、上は天皇、大名から、下は武士、町人、農民まで帰依した者は極めて多かったです。そして、ほとんど日本全土でお寺が立てられました。こうして黄檗宗は一時大変な隆盛ぶりを見せましたが、ここで言いたいのは、黄檗宗の僧侶たちが伝道する時、あくまでも中国語を使っていたということです。これは後の中国語の流行に大きな役割を果たしました。例えば、五代將軍綱吉の時、老中を勤めていた柳沢吉保という人がいまして、彼は若い時から、黄檗宗と親密な関係をもっていました。そのため、吉保は中国語を勉強し始めました。しかも吉保の中国語がかなり達者だったことは、文献から判ります。当時吉保のもとで、荻生徂徠をはじめ、たくさんの儒学者が集まっていました。吉保の影響で、儒学者の間に、中国語のブームが起こったという次第であります。

話が少し変わりますが、ここに岡島冠山という人が現れてきます。冠山は長崎の出身で、若い頃、一度唐通事を務めました。後にそれは恥ずかしい仕事だと思って辞めました。三十代の時、京都へ遊学に行きまして、そこで初めて白話小説を翻訳し出版しました。又この時から『水滸伝』の翻訳にも取りかかっ

たのであります。この間冠山の中国語は京都で有名になったようで、間もなく江戸にまで呼ばれました。ちょうどこの時江戸では、中国語のブームがありましたので、冠山は「訳社」という徂徠たちが作った中国語学会の講師として招かれました。冠山は江戸に十年間ほどいましたけれども、この十年間は彼の黄金時代だと言えます。彼は幅広く漢学者や黄檗僧と付き合っていました。萱園派の芳しい業績の中には、優れた語学力の持ち主の冠山の協力も多分にあったように思われます。また冠山自身も、数多くの著作を残しております。その著作はほとんど語学関係の本でしたけれども、しかしそれは決して彼が望んだところではなかったようです。自分で『水滸伝』などのような日本の白話小説を書きたいというのが、彼のかねてからの夢でした。そこで『太平記演義』という小説を書き上げました。『太平記演義』は日本の歴史に題材を取って、中国語で書かれた長篇小説として、日本文学史の中で、非常にユニークな作品だというふうに高く評価されています。この『太平記演義』を読んでいると、少しぎこちないところがないでもないが、全体のイメージとしては如何にも『水滸伝』を読み込んでいるような気がします。

このように徂徠をはじめとする萱園学派の儒学者たち、岡島冠山、黄檗宗が中心になり、江戸で中国語のブームを起こしたという次第であります。ところが、1709年5代將軍綱吉が亡くなったということで、まもなく吉保が失脚したため、萱園学派がたちまち衰退の道を辿ってきました。その後、冠山や黄檗宗の僧侶たちが相次いで江戸を立ち去って、京都へ向かいました。これで江戸における中国語のブームが一応冷めてきましたけれども、しかしそれは決して白話小説の終焉を意味するものではありません。むしろその時からこそ、白話小説の隆盛の時期を迎えてきたというふうに思われます。ただその場所は江戸から上方へと移ってきただけなんです。先ほど申し上げましたように、冠山たちは江戸を離れて、京都へやって来ました。冠山の場合は、京都でわずか四年間ほど暮らして、亡くなりましたけれども、その死の直後、冠山が訓点を加えた『忠義水滸伝』（1728）が出版されました。この『忠義水滸伝』は『水滸伝』翻

訳のはじめだとされています。またこの時、京都には既に『水滸伝』の研究者が何人か居りました。例えば、岡白駒とか、晁世美とか、陶冕など、もしかしたら彼らは冠山に教わったかもしれないとも言われています。この人達は或いは講義をしたり、或いは『水滸伝』の注釈書を書いたりして、大変活躍しました。彼らの努力によって、『水滸伝』など中国白話小説がとでも持て囃されまして、またこの時から、国文小説界にも影響を与えるようになりました。

以上は、江戸文壇への『水滸伝』の浸透の様子を見てきたわけなんですけど、次は江戸後期の文学に対する『水滸伝』の影響、主として江戸後期の文壇を独占した読本との関係について、申し上げたいと思います。

二

先ずそれまでの文壇の様子をおおざっぱに遡ってみたいと思います。本当の意味で、近世小説というものは、井原西鶴の浮世草子から始まったように考えられます。御存知のように、西鶴は『好色一代男』、『好色五代女』などたくさんの作品を書いておりますが、特に晩年の『世間胸算用』、『西鶴置土産』等では、近代小説への目覚めも見られるようになりました。しかし、西鶴以後の小説、気質物とか所謂八文字屋本は、長篇小説への努力があったにもかかわらず、それを引き継ぐことが出来なかったのです。したがって、十八世紀の半ば頃になると、そういった硬直した八文字屋本は段々人気を失ってしまいました。そこへ『水滸伝』など白話小説の流行がありました。これは窮地に陥った国文の小説家たちに大きなヒントを与えたように思われます。そこで八文字屋本の代わりに、読本という新しいジャンルが台頭してきたのであります。

滝沢馬琴は1772年に建部綾足が書いた『本朝水滸伝』を読本の始めとしています。これに対して、現在の学者が異論を唱えておりますが、それはともかくとして、『本朝水滸伝』は初期読本の代表作として、いろいろな意味で、非常に重要な作品だと思います。題名でも判るように、この作品は『水滸伝』と大きな関係を持っております。時間の関係で、詳しいことは申し上げられません

が、簡単に申し上げますと、『本朝水滸伝』は、『水滸伝』の構想を大いに踏まえていますが、一方原作からの脱化も試みられました。また日本の歴史に題材を取りながら、その上に白話小説の趣向を取り入れているという所にはそれからの読本の行方を規定するものが含まれているように思われます。

『本朝水滸伝』はベストセラーになったようで、引き続いて『水滸伝』の翻案物が沢山出されました。それは所謂水滸物と呼ばれる小説の流行です。それには、『日本水滸伝』、『女水滸伝』、『いろは酔故伝』などがありました。これらのほとんどの作品はまだ単なる模倣の段階に止まっていて、これといった特色がありませんが、後期読本の土台を築いたところに意味が有るように思われます。

『水滸伝』は読本ばかりでなく、洒落本や黄表紙にも影響を及ぼしたのであります。詳しい話は省略させていただきますが、このように白話小説の刺激を受けて、近世小説のためには、一本の新しい道が開かれるようになりました。

続きまして、この時期つまり十八世紀の後半、近世文学は一つの転換期を迎えました。一般に文運東漸と言われていますが、それは、開幕百五十年以来、江戸が都市として完全に成熟して、経済活動においても文化的生産力においても、上方を凌ぐようになったため、それまで上方を中心に展開された文学は、江戸に移ってきたのであります。しかし、江戸の成熟や繁華と言っても、着実に進行している幕藩制の危機がいたるところで顔を覗かせています。為政者はこうした局面を打開するために、享保改革、寛政改革など相次いで改革を行いました。何れも成功しませんでしたけれども、改革が行われるたびに、文学に対する規制が厳しくなってきたのであります。例えば、寛政改革の時、山東京伝が洒落本で、手鎖五十日処分されたのは有名な事件です。文学の発展はとても難しくなって、転々と変身することを余儀無くされました。そして後になって、ついに勸善懲悪を表面に打ち出した読本一つに絞られてしまったというしだいです。

後期読本或いは江戸読本とも呼ばれていますが、こうした時代情勢を背景に

展開されました。その最初の作品は京伝が1799年に出した『忠臣水滸伝』とされています。その理由としては、内容的に単なる怪談奇事に止まらないで、勧善懲悪という思想の裏付けを持っていること、また文体のうえで一種の和漢混合の形が整っているなどが挙げられます。『忠臣水滸伝』は京伝の読本の処女作ですが、その動機を見ますと、もと自分の弟子だった馬琴が既に読本の創作で有名になったことに刺激されて、これを書いたわけです。この時から、二人はライバル関係になりました。しかし、まもなく『椿説弓張月』の成功によって、馬琴は完全に京伝を凌駕するようになりました。その以後読本界は馬琴の独壇場となりました。ちょっと面白いのは滝沢馬琴も『水滸伝』の翻案から読本を書き始めたのであります。馬琴は一生にびっくりするほど、沢山の読本を書いてしまいました。彼が読んだ白話小説も本当に信じられないほど多かったのです。しかもそれらの小説はさまざまな形で、馬琴の作品の中に取り入れられています。しかし馬琴の最も興味を持っていたのは、『水滸伝』だったようです。日本の『水滸伝』を書こうとするのは馬琴の望むところでした。それで馬琴が二十八年間をかけて、晩年失明してからもお嫁さんに一字ずつ教えながら、書き上げたのはかの有名な『南総里見八犬伝』です。この作品は近世小説の一つの到達点を示すもので、近代文学はこれを否定するところから出発しなければならなかったというように見られます。またこの作品が『水滸伝』と深い関係を持っていることもよく知られているとおりで、もう時間がありませんので、これぐらいにしたいと思います。

以上のように『水滸伝』は、始めから終わりまで絶えることなく読本と関係を持ち続けてきました。『水滸伝』との関係は読本であること条件ではありませんが、『水滸伝』の影響なくしては、読本の発展はありえなかったと言っても、言い過ぎではないと思います。